説経集

室木弥太郎　校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第八回）

説経集

昭和五十二年一月五日　印刷
昭和五十二年一月十日　発行

校注者　室木弥太郎
発行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六六）五一一一（業務）
東京03（二六六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

定価一九〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yataro Muroki, Printed in Japan, 1977.

目次

凡例……三
かるかや……九
さんせう太夫……七九
しんとく丸……一五三
をぐり……二〇九
あいごの若……二九九
まつら長者……三四五

解　説……三九一
付　録
地名・寺社名一覧……四二七
校異等一覧……四三八
本文插絵一覧……四五〇
参考地図……四五七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

日本の古典に関心を持つ一般読者に、正確で読みやすい説経のテキストを提供するため、次のような配慮をした。

一、本書の目的に従って、本文を次のように作成した。

1　底本は現存最良のものを用い、それぞれ原本（「をぐり」は原本の写真）によった。ただし「まつら長者」のみは原本の所在が不明なため、横山重編『説経正本集』第一の翻刻によった。

2　底本の誤脱あるいは不明の部分は他の本によって補ったが、それでも不十分な場合は校注者の判断によって補正した。巻末の「校異等一覧」を参照されたい。

3　通読しやすいように、底本の仮名を漢字に、あるいは漢字を仮名に改めたところがある。漢字は現在の標準的な表記法に従った。例えば「みなと」の場合、当時は「湊」としているが、これを現行の「港」に統一した。ほかに次のような例がある。

　みめ（眉目→見目）　ちご（児→稚児）　すてご（棄児→捨て子）　へいゆ（平愈→平癒）

4　仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した。ただし、正確な読みに問題がある場合は底本のままとし、必要に応じ頭注に説明を加えた。例えば元禄四年刊の『初心仮名遣』によると、「ふ」と書きながらムと読む場合がある（煙（けぶり）・睡（ねぶり）・冠（かぶり）・侍（さぶらひ）・弔（とぶらひ））。高羽五郎氏によると、同じ『節用

集』の中でも特に易林本は、「ふ」でムの音を表す仮名づかいの傾向が強い。同じころの別の本はこのほかに、「ふ」をモと読み、「ひ」をミと読み、「へ」をメと読む例のあることを指摘している。またムと読む「ふ」は「ぶ」の濁点無表記ではないかという考えもある（森田武・前田金五郎両氏）。

5　次のように、打ち消しの助動詞の「ず」の下、または形容詞連用形の下に接続する場合の「は」は、バと読むことも考えられるが（その例があるが）すべて原本のままとした。

高野に心止まらずは（「かるかや」二九頁六行目）

世に出てめでたくは（「さんせう太夫」一〇六頁二行目）

6　「をぐり」の底本（絵巻物）は、撥音（はつおん）を「む」と表記しているが、すべて「ん」に改めた。

7　送り仮名は新送り仮名法によった。

8　底本「有」「申」の読みを、アリ・アル、モウシ・モウスのいずれとするか、また「出」の読みを、イダ・ダ、あるいはイデ・デのいずれとするか、判断に苦しむ場合があるが、用例等を考慮していずれかに決定した。例えば「有」の終止形は、「お尋ねある」というふうに、上に敬語「お」がある場合は「ある」とし、ない場合は「あり」とした。

9　漢字に適宜振り仮名を付けた。ただし「御」（オン・オ・ゴ・ミ）、「今日」（コンニチ・キョウ）、「あき人」（あきビト・あきウド・あきンド）など、底本の表記が二様以上に読める場合は振り仮名を付けなかった。

10　底本はいずれも句読点を欠き、段落がない。本書はこれに適宜句読点を付け、段落を設けて改

行した。

11　会話あるいは独り語りの部分には「　」あるいは『　』を付けた。しかし地の文と区別しがたいところもある。

12　底本の挿絵はそのまま載せた。ただし「をぐり」は底本が絵巻であるため、他とのバランスを考慮して、刊本の挿絵を用いた。挿絵の一々については巻末の「本文挿絵一覧」に簡単な説明をし、挿絵の中の文字を翻刻した。

一、本書の目的に沿って、最少限の傍注（色刷り）と頭注を付した。

1　傍注は、本文の難解な部分に口語訳を付し、通読の便を図ったものである。

2　傍注欄の〔　〕は主語・目的語等を補うものである。また（　）は補足的な説明を加えるもので、例えば、

まだ夜も深や高槻（月）や、

は、「槻（つき）」に同音の「月」を掛けていることを示す。

3　頭注は、傍注だけでは不十分と思われる語句、および本文の読みあるいは校異について施した。

4　頭注欄には、随時本文を要約する小見出し（色刷り）を付けた。また語句の注のほか、本文の理解に必要な説明は、＊印を付して施した。

5　地名・寺社名について、スペースの関係上説明のできなかったものは、巻末の「地名・寺社名一覧」にゆだねた。

6　頭注に引用した辞書等の略記号は次の通りである。

日葡―長崎版日葡辞書　日仏―パジェス日仏辞書　ロ氏文典―ロドリゲス日本大文典（土井忠生訳）　温故―温故知新書　運歩―運歩色葉集　文明―文明本節用集　黒本―黒本本節用集　易林―易林本節用集　饅頭―饅頭屋本節用集　天正―天正十八年本節用集　書言―書言字考節用集　明応―明応本節用集　弘治―弘治本節用集　永禄―永禄本節用集　仏教大辞典―望月『仏教大辞典』　説経節―荒木・山本『説経節』

本書は先学の研究成果に負うところが多く、何ほどの前進もないが、特に次のことを明記して感謝の意を捧げたい。

一、横山重氏には「あいごの若」をはじめ諸本の借覧、およびその翻刻を許された。また插絵の写真のほとんどを提供して頂いた。

一、天理図書館には本書の底本となった貴重書の閲覧ならびに翻刻を許された。

一、故祐田善雄氏、高羽五郎氏・吉永孝雄氏・信多純一氏・原栄一氏・柿本典昭氏・多田治夫氏・藤村重美氏・中野文夫氏・梶井重明氏をはじめ多くの方々から御教示を得、便宜を図って頂いた。

一、本書は島津久基氏『近古小説新纂初輯』ならびに荒木繁・山本吉左右両氏『説経節』に啓発されるところが多い。また荒木氏から「あいごの若」の插絵写真の提供を受けた。

一、本書は、新潮社の関係各位から、非常なお骨折りを頂いて、ようやく完成したことを特記しておきたい。

説経集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かるかや

一 説経独特の序詞。神仏の前生（前の世）が人間であって、その人間について語るが、ここは親子地蔵の本縁（由来）を説く形式になっている。親子地蔵の本地（本源）が人間重氏で、その重氏を中心に物語は展開する。

二 長野市の善光寺本堂。本尊は著名な阿弥陀如来。

三 現在、長野市石堂町西光寺と同市往生寺山往生寺（いずれも浄土宗）にある。本篇の末尾及び写本『かるかや』では、善光寺の奥の御堂としているので、往生寺（善光寺本堂の西北約七〇〇メートル）らしく思われる。

重氏、遁世修行を決意

四 中世、肥前（筑前は誤り）松浦地方（佐賀県）に割拠した武士の集団。

五 今日のおおよそ福岡・熊本・佐賀・長崎・鹿児島の五県に相当する。

六 御所もすばらしく、四季の美景を居ながらにしてながめられるように建てた意。

七 慣用句。「ころはいつぞのころなるらん、弥生なかばのことなるに」（奈良絵本『十二段草子』）。

八 底本「たうしう」。「当春」（『言文明』）、「タウシユ（アタルハル）」（『日葡』）。

九 「玉」「黄金」は極めて美しい意。ここは婦人席のきらびやかな様をいったか。

一〇 慣用句。酒を入れる大きな竹筒やかめ。

一一 酒盛りの前のしきたりか（舞曲「烏帽子折」）。

一 ただ今、説きたて広め申し候本地は、国を申さば信濃の国、二 善光寺如来堂の弓手のわきに、三 親子地蔵菩薩といははれておはします御本地を、あらあら説きたて広め申すに、〔その菩薩の〕由来を詳しく尋ね申すに、〔一元は〕これも大筑紫筑前の国、松浦党の総領に、重氏殿の御知行は、五 筑後・筑前・肥後・肥前・大隅・薩摩、六 六か国が御知行で、御所をさへ四季を学うでお建てある。

四季の景にならって

春は花見の御所、夏は涼みの御所、秋は月見の御所、冬は雪見の御所と申して、四季を学うでお建てあるが、七 ころはいつなるらん、三月は当春半ばのことなるに、八 一家一族御一門、花見の御会とお触れになる。花見の御会の座敷には、九 玉の簪・黄金の御簾、大筒・大瓶一〇をかきすゑて、一一 順の杯逆に通り、一二 逆の杯順に巡る。

一 底本「しけうち」。「繁氏」を当てることもできる。三九頁注九参照。
二 底本「たふ〳〵とうけ」。『ロ氏文典』に「たぶたぶと受けて」。
三 東山清水寺の地主権現（地主神社）の桜で、謡曲「西行桜」等で知られている。この品種は一重、大輪、白花、微紅を帯びたものと解されている（『古今要覧稿』、三好学『桜』）。
四 未詳。江戸版「二しほ三しほと巡り」（「しほ」は「潮」か）。「一瀬戸二瀬戸」で、海や川の狭くなった所で舟が回るように、一・二・三度まで回った意か。
五 老人が先に死に、少年があとから死ぬとは限らないこと。ここは人の死はいつ訪れるか分らない、この世の無常。
六 「いかに……に申すべし」は慣用句。「いかに」は呼び掛け。
七 仏門に入って修行します。「遁世」は俗世を遁れて仏門に入ること。
八 不満ですか。「の」は後に出る「に」や「や」「よ」とともに説経に多い間投助詞。
九 底本「しゆんき」。「順儀」（『運歩』等）、「巡儀」（『易林』等）、「順義」（『書言』）を当てる。

その時重氏殿は、酒をたぶたぶと受け、杯を手もとに置かれた時控へさせたまひし時、時ならぬ山おろしがそよとして（そよそよと吹いて）、いつも寵愛の地主桜（枝の）と申すが、本の開いた花は散りもせで、末のつぼうだ花（先のつぼみの花が）が一房散つて、この花よそへも散らずして、重氏殿の杯の中に散り入つて、ひとせとふたせと、三巡りまで巡つたり。重氏悟りの人なれば、まづこの花を感じたまふ。花だにも盛りを待たで散る時は（散るのだから）、老少不定は目の前とおぼしめし、「いかに御一門に申すべし。それがしにはいとま賜れ御一門。遁世修行」とのたまふなり。

コトバ 御一門はきこしめし、「花見の御会の座敷にて、花の散つたが不足かの。お止まりあれや重氏殿」。重氏この由きこしめし、「花も順儀を散るならば、末のつぼうだ花は木に留まり、開いた花の散る時こそ、それは順儀の散りやうよ。開いた花は木に留まり、つぼうだ花の散る時は、老少不定は目の前なり」。

御一門はきこしめし、「六か国が御知行で、八万騎の大将で、な

一〇 特に名を指さない高貴な人（『日仏』）。

一一 栄華・富裕。富み栄えること。

一二 底本「すんと」。『ロ氏文典』に「ずんど」。

花見の宴

にが不足で遁世とはのたまふぞ。それなにがしの遁世は、我が御知行を、勝る武士に奪ひ取られ、身の置き方のない時にこそ、遁世修行と聞いてあり」。重氏きこしめし、「我が御知行を、勝る武士に奪ひ取られ、身のたたずみのなき時の遁世は、身過ぎ世過ぎのためぢやもの。栄耀・有徳を振り捨てて遁世するこそ、後の世の後生の種ではあるまいか。なにとお止めあるとも、思ひ切つたる重氏を止まるまい」と御意あつて、居たる座敷をずんど立ち、持仏堂にお移りある。

一〇 それなにがしの遁世は（たの人の遁世は）

一一 栄耀（えよう）・有徳（うとく）

一二 ずんど立ち（立ち上がり）

一　貴人の妻の尊称。
二　底本「ちよつるひめ」。
三　地の薄い着物。
四　「……てに」は説経独特の語法。「に」は現代語の「ね」に近い間投助詞。
五　「お＋動詞連用形＋ある」は独特の慣用語法。
六　説経の慣用語。文末に付く感動の助詞。
七　「御台所」の略。貴人の奥方。前の「北の御方」を指す。
八　底本・写本とも「ふせう」。「不請」か。『無量寿経』の「不請之友」あるいは「不請之法」の「不請」で、菩薩が衆生の請求を待たずに大慈悲をもって利益を与える意であるが、「夫の不請」は、御台が請い求めないのに夫のおかげで授かったもの、の意であろうか。あるいは「不浄」で、九穴（九竅）すなわち両眼・両耳・両鼻孔・口・両陰より出るきたないもの、の意か（『孝養集』巻上に「九の穴より色色に出る不浄」とあり、『説経節』は精液とする）。
九　底本「みつこ」。「ミヅゴ」（『文明』）、「ミヅコ」（その他の節用集等）。「若子」あるいは「若」を当てる。赤子。しかしここは胎児の意。

フシこのことが北の御方に漏れ聞え、三つになる千代鶴姫を乳母にいだかせ、薄衣取つて髪に置き、渡り廊下をはや過ぎて、重氏殿の住み慣れたまふ持仏堂に参り、間の障子をさらりと開け、重氏殿の御姿、見上げ見下ろし召されてに、とかく物をば御意なうて、まづさめざめとお泣きある。フシ「いかに我が夫に申すべき。承れば、今日の花見の御会の座敷にて、花の散つたを御覧じて、遁世修行の由を承る。花見の御会の座敷にて、花の散つたが不足かなう。お止まりあれや重氏殿」。

コトバ　重氏この由きこしめし、「御一門のお止めあつても止まらぬ重氏を、なにとお止めあるとも止まるまい」と御意ある。御台はこの由きこしめし、今申さうか申すまいかとは思へども、今申さでは、いつの世にかは申すべき、「恥づかしき申しごとではござあれども、重氏殿は二十一、自らは十九なり。嫡子に千代鶴三つになる。女の役とて、夫のふせうを受け取つて、胎内に七月半にまかりなる、水

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com